名探偵とドラえもんズ～摩訶不思議な日々～part 2

春崎やよい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
名探偵とドラえもんズ～摩訶不思議な日々～ｐａｒｔ２

【Ｎコード】
Ｎ２８８３Ｅ

【作者名】
春崎やよい

【あらすじ】
名探偵とドラえもんズ～摩訶不思議の日々～の続編です。先にそっちを読んでから、読んでください。ボーイズラブを含みます。嫌いな方は、読まないほうがいいです！

ドラパンが米花町にやってきた！組織復活！？

此処は帝丹高等学校。
蘭と園子はいつも通りに学校に登校し、普通に授業をしていました。
はあ・・最近、新一電話してくれないな・・・
蘭はため息をつきました。
ふと窓から外を見ました。
とくに何かを探しているわけではなくて・・ただ単に見てみようと
外に人がいます
校門前にたたずんでいる一人の青年。年は、２０歳くらいだろうか
黒い服を着ていて、ステッキみたいなものを手にしています。
さらに黒い髪の上には黒い帽子をかぶっています。
周りから見れば、コスプレをしている人にしか見えない。
蘭は不思議と言ったように見ています。
「コラ、毛利。よそ見をしていていいのか？」
先生に指摘され、慌てて前を見た。
どうやら、いつの間にか授業が進んでいたらしい
蘭はまた窓の外を見た。校門前にいた青年はもういない
一体何をしに来たのだろう？

授業が終わり、放課後になりました。
蘭は園子と一緒に帰っています
園子はさっき蘭は窓の外で何を見ていたのか聞いてみることにしま

した。
「ねえ、蘭。窓の外見ていたよね？何見ていたの？」
「男の子を見ていたの。何しているのか気になって」
園子はへえと言って頷いていた。

園子と別れ、蘭は家に帰って来ました。
事務所前にさっき見た青年が立っています。蘭は青年に近づき声を掛けて見ることに
「あの何しているんですか？」
蘭は恐る恐る声を掛けました。
青年は蘭がいることに気がつき、顔をそっちに向けました。
「毛利蘭という女を捜している。此処に住んでいると聞いてきたんだが、いなかったようです。それでは・・」
青年はそういい蘭の前から立ち去ろうとします。
「毛利蘭は私です」
青年は足を止め、振り向きました。蘭は青年に自分が毛利蘭だという事を毛利探偵事務所で話しました。

青年はソファに座っています。
現在蘭は、お茶を入れている最中。
小五郎は浮気調査に出かけていて事務所を空けていた、コナンはまだ学校から帰ってきていない
蘭は青年の前にお茶をおきました。
「どうぞ」
「ありがとうございます」
蘭は青年の前に座りました。
「私の名は、ドラパン。２１世紀を護って欲しい。」
急に言われて、何を言っているのかわからない言ったような顔をしました。
蘭は目を丸くしている
「あの話の意図が分からないんですが・・・」蘭は、困ったような顔になった。
「説明がまだだったな。実は・・・」
ドラパンが此処に来た理由・・・そして、２１世紀を護って欲しい理由を話しました。
すべてを聞いた蘭は、信じられないと言う顔をしている。
そもそも、ドラパンが此処に来たのは、蘭にこの計画に加担して欲しいから
相手は、あの組織。そう、新一が追っているカラスのような真っ黒な服を着たやつら
そいつらは、絶大な力を持っているといわれている。
変な薬を作っていると言われて妙な噂も流れていた。危ないといったほうがいいかもしれない。

とにかく、その組織を早く壊滅させて欲しいと蘭に伝えました。けれど、蘭はその計画に係わるのだろうか？
「分かりました、協力しましょう」
蘭は力強く頷きました。ちょうど話が終わったときに子供たちの声が聞こえてきました
コナンが帰って来たのだろう。蘭はそう思い、立ち上がりました。ソファに座っているドラパンにゆっくりしていってくださいと伝えて、台所に入って行った。

探偵事務所の扉を開けると、青年がソファに座っているのをコナンが見ました。
「ただいま・・」
「お帰りコナン君。」
急いで蘭は台所から顔を出してきました。手には、お盆を持っている。その上には、探偵団とドラえもんズの人数分用意されているコップが並んでいる。
蘭は、コナンの後ろにいる少年探偵団を見つけると、いらっしゃいと声を掛けました。
少年探偵団全員が中に入ってくると、後からネコ型ロボットだったドラえもんズが入ってきました。
「あれぇ、あそこにいるのってドラパンじゃない？」

ドラリーニョがドラパンがいることに気がつくと、みんなに聞こえるような大きな声で言いました。
ドラリーニョが指を指しているほうを見ると、確かにドラパンがソファに座っている。
「そうですね。ドラパン、お久しぶりです」
王ドラがドラパンのそばに行きました。
ドラパンが玄関のほうに目を向けると・・・
「久しぶりだな。ドラえもんズ」
ドラえもんズはドラパンのことを知っているようで・・・。コナンは王ドラに聞きました。
「ねえ、ドラパンさんとはどういう関係なの？」コナンは、困惑の顔を王ドラに向けて聞きました。
「ドラパンは世紀の怪盗なんです。」と王ドラは応えてくれました。
「そうなんだ」
コナンは夕飯が出来るまでドラパンを見ていることに・・・

暗くなってきたので少年探偵団は帰って行きました。
六時ごろ、夕飯が出来た。蘭がドラえもんズの食べる分も作ったと言うので、食べていくことにしました。

小五郎が帰って来たのは八時を回っている頃・・
「お父さん、お帰り」
「ただいま・・・・・・・で？これはどういうことだ？」

小五郎は目の前に広がる光景を見て、蘭に聞きました。
目の前に広がる光景を見て疑問に思うのは、当然だと思う。
なんせ。
ドラメッドが絨毯の上でドラパンと話をしていて、ドラリーニョが入り口近くでヘディングをしていて、その隣でマタドーラがシエスタをしていて、ドラニコフがソファの上で童話シンデレラを読み、王ドラとコナンが話をしてドラえもんがその横で話を聞いていて、キッドは空気方を磨いていたのだから、疑問に思うだろう。
「お父さん、ご飯出来ているけど・・」
食べる？って聞こうとしたら、小五郎は即答で「食べる！」と言いました。
小五郎は、二階にある自宅に行き、食卓の上においてある夕飯を見ました。

ご飯を食べ終わった小五郎は、事務所に戻ってきました。まだ、ドラえもんズがいた。
「俺、上にいるから、閉めておけよ」
小五郎は蘭に言うと、上に上がっていきました。
今日は疲れたな～と思いながら、台所に行き冷蔵庫を開けて、ビールを取り出します。
居間に戻ってきて、テレビを付けました。ちょうど、つけたチャン

ネルでニュースをやっています。
ニュースを見ていると、組織がどうしたとニュースで騒がれています。
小五郎はそれを見て、飲んでいたビールを噴出しました。
「ちょっと待てー！！」
小五郎は叫びました。
その声を聞きつけて、下にいたドラえもんズとコナン、蘭が上に上がってきました。
「お父さん、どうしたの？！」
蘭は、テレビに指を指している小五郎を見ます。
「組織って・・・・・コナンの体を小さくした組織がニュースでやってる・・・どうなっているんだ？捕まったんじゃなかったのか？」
小五郎がそう思うのは当たり前
確かに黒の組織は捕まったのは確か（名探偵とドラえもんズ～摩訶不思議な日々～を参照）。
けれど、それは幹部のジンだけがタイムパトロールに捕まっただけだった。だから、黒の組織が崩壊したわけではなかったのです。
あの後奇跡的に（裏社会）で組織は立ち上がりました。小五郎が知らないのは当たり前。
警察も目を光らせていたが、そんなところで活動をしていたなんて知らなかったから今までほっておいたのがその結果、（表社会）で活動を再開しました
「まさか、お前たちが此処に来たのって・・・」
小五郎はドラえもんズが此処にきた理由に気がつきました。
「私たちドラえもんズはこのことは知りませんでした。ですが、ドラパンが今回こっちに来たのは、そういうことでしょう。」
ドラパンは頷いきました
「そういうことだ。それに毛利蘭にも協力してもらうことになったからな」
コナンはそれを聞いて、驚いた顔になりました。

「何だって?!蘭姉ちゃん、それ本当なの?!」
「ええ、そうよ。ドラパンさんに私の力が必要だからって言われて・・・」
大丈夫よと蘭は笑顔で付け足しました
「そう。気をつけてよ」
コナンは蘭に危険なことをさせたくありません
不安な顔はコナンから拭い去れませんでした
結局、夜も遅かったため、ドラえもんズとドラパンは、泊まることになりました

ドラパンが米花町にやってきた！組織復活！？（後書き）

全く予告なしの続編です。
あの後の組織の行動が大変に気なる方がいるかな？と思い、作ってしまいました。勝手に作ってしまい、申し訳ありません。
評価・感想・ダメだし下さい。最近来てないので、お願いします。

コナン告白！ドラパン帝丹小学校へ

朝起きると、ドラパンが布団にいないことにドラメッドは気がつきました。何処に行ったのか探して屋上に着てみたらいました。ドラメッドは、ドラパンの近くに行きました。

「ドラパン、どうしたであるか？」

優しい口調で言います。

「ドラメッドか。此処の朝は、気持ちいいな」

ドラパンは、横にいるドラメッドを見てまた、前を向きました。

「そうであるな。ドラパン、お主組織を倒すためだけこっちに来たわけではないであろう？」

ドラメッドは、優しい笑みを浮かべ、ドラパンに此処に着た理由を聞いた。

「流石、ドラメッドだな。ああ、そうだ。組織を倒すためだけに米花町に来たわけではない。蘭さんの腕前を見るためでもあるな。どんだけ強いのか気になってな」

ドラパンはニッと笑いました。それを見てドラメッドは頷いている。そういうことであったか。ドラパン、気づいておるか？我輩の気持ちに・・

心の中で呟いきました。けれど、ドラパンは、ドラメッドの気持ちに気がつきません。まだ・・

組織が終わったとき、新たなことが起きるそんなざわめきがドラパンの胸に突き刺さりました。

二人が屋上にいる中、ドラえもんが二人がいないと気がつき、騒いでいました。ドラえもんが騒ぎ立てていたので、ドラリーニョ・王ドラ・ドラニコフと起きています。
「ドラメッド、一体何処にいったんだろう？心配だな・・」
あっちにうろうろ、こっちにうろうろ。ドラえもんは、部屋の中を行ったりきたりしています。
ドラメッドはどこかに往くときは、必ずといっていいほど手紙を残して出かけていました。
ドラえもんが心配するのは分かります。
けれど、それをちっとも心配しないで、グースカ寝ているマタドーラもどうかと思いますが・・・
マタドーラを起こそうとしている王ドラは、ドラえもんに顔を向けました。
「ドラえもん、心配なら探しにいったらどうですか？」
「そうしたいけど、入れ違いに帰ってくるかもしれないもん。それにしても、ドラパンもいなくなってるし。まさか、二人でどこかに出かけているんじゃ！」
ドラえもん、当たっています。こういうとき嫌な予感が出てきたりする。
「まさか、二人とも・・・どこかで悪いことでもしているんじゃ・・！！不安になってきた！！！」
案の定、ドラえもんは変なこと言っているし・・・（変な妄想が膨らんでいる）
悪いことってどんなことだよと王ドラは突っ込みそうになりましたが、喉の奥でグッと我慢しました。

「ご飯できたよ」
蘭が呼びに来ました。
「はあーい、今行きます！」
王ドラがそれに答えました。
「とりあえず、ご飯にしましょう。その後で考えても大丈夫でしょう」
王ドラのいうとおりかもしれないとみんな考えました。
ドラえもんたちは、リビングに移りました。

リビングに行くと、ドラメッドとドラパンがいます。
「ドラメッド何処に行っていたの？心配したんだから」
ドラえもんが不満たらたらの口調でドラメッドに詰め寄りました。
「ごめんである。ドラパンと一緒に屋上にいたんである」
ドラリーニョはドラパンと名前を聞いて身を硬くしました。
知らないと思うが、ドラリーニョはドラメッドのことが好き。そんなドラパンをライバル視している。
ドラリーニョはドラパンを凝視しています。それを察知したのか、ドラパンが何だ？とドラリーニョを見つめ返してきました。ドラリーニョは目を逸らしました。ドラパンは何だあと言った様な顔をしました。
「あれ？コナン君は？」
蘭がコナンがいないことに気がつきました。
「コナン君なら、博士の家に行くといって朝早く家を出ましたけど」
王ドラは、朝も早い時間にコナンが事務所を出て行くところを見ていた。そのことを蘭に言いました。
「そうなんだ。」

蘭は、心配といったような顔をしています。
王ドラは、蘭を見ています。察知したのか、王ドラは蘭に聞きました。
「心配ですか？」
蘭はコクリと縦に頷いきました。
王ドラは四次元袖からタイムテレビを取り出します。
「コナン君が今何しているのか、見てみましょう」
王ドラは、タイムテレビにコナンを映し出しました。

コナンは、博士の家にいます。灰原は、コナンの目の前にあるソファに座ってコーヒーを啜っています。
『灰原、組織のことで何か知らないか？』
『昨日のテレビ見たのね。』
灰原は、顔色を変えずにいいました。
『ああ、おっちゃんがたまたま付けたニュースで組織のニュースをやっていたんだ。それにドラパンが来たから、気になってな。』
『危険なことしないで！ジョディ先生から聞いたわ。ジンが逃げ出したらしいの！これ以上、首突っ込むのはやめて！』
灰原の声は震えています。
『灰原・・・』
『・・・あなた言ったじゃない。絶対護るって・・・』
哀は泣いています。
あなたがいなくなったら、私どうするのよ。誰が私のこと護ってくれるのよ
哀は地下室に入り際、コナンに言いました。
『邪魔しないでよ。』

地下室に入って行きました。
一人残されたコナンは、ソファに寝転がりました。
『可愛くねえの。素直になればいいのに』
立ち上がり、残りのコーヒーを飲み干しました。台所に行き、コーヒーを淹れました。二人分のコップを持ち、地下室に入って行きました。
コンコン
『灰原、入るぞー！』
扉を開けて、中に入りました。哀は、パソコンに向かって難しい数式と格闘をしています。
『コーヒーいるか？』
『ありがとう』
机に置き、備えつきのベッドに座りました。
『何？用があったから来たんでしょ？』
『よくわかっているな。組織を倒したら、灰原にいう事があるんだ』
『何かしら？』
灰原は動かしている手を止めて、コナンに振り返りました。
『蘭に本当のことを言うと思ってな』
『あなたが工藤新一だってこと、もう知っているんでしょ？それ以外にいう事あるのかしら？』
『そうだよ。あのさ…やっぱりこういうのってやばいと思うんだ。いい加減…やめにしないか？』
『工藤君、何が言いたいの？』
コナンは、黙ったまま、灰原に抱きついきました。
『工藤君！？』コナンの行動に哀は、びっくりしています。
『無理かもしんねえな。やっぱ今言う。俺は、灰原のことが好きだ！』
哀は、固まりました。
何言っているの？私幸せになる資格ないの
『灰原は？』

『蘭さんになんて説明するのよ。蘭さんは、あなたのこと待っているのよ？』
『ちゃんと説明する。俺が灰原のこと好きだってこと』
ちゃんとケジメつけなくちゃな、と思っていた。
ずっと、考えていた。もう蘭を好きでないことに、そして今は別に好きな人がいるからと
『工藤君。』
『何だ？』
『いい加減にはなしてくれない？』
『悪ぃ』
コナンは灰原を放しました。
『私も好きよ。工藤君のこと』
顔を赤くして地下室から出て行きました。
『灰原・・・お前、最高だよ。』
コナンは、最後まで灰原を愛し続けることを誓った。同時に元の姿に戻ったら哀と結婚すると誓いました。

地下室から出てきたコナン・灰原・博士は朝食を食べ、片づけをしてから二人で学校へ行きました。
まさか、それを蘭とドラパン・ドラえもんズに見られていたことは知りません。
学校に来たコナンと灰原は、ドラえもんズに絡まれました。
「コナン君、哀ちゃんのこと好きなんでしょ？」
「そうだけど・・・それがどうしたの？」
「朝、タイムテレビでコナン君と哀ちゃんの様子を見ていたんだ。そしたら、会話聞いちゃって」
「ぐ・・・見ていたのか？」
「しっかりと見ていました」
王ドラがコナンとドラえもんの会話を挟んで言いました。そのあと、

マタドーラに散々言われたのです。いらんことばかり
「はあ、疲れた」
コナンは、自分の席に座りました。コナンの隣の席に座っている哀に聞こえていた。
「あらあら、名探偵さん。どうしたのかしら？」
「ドラえもんたち俺たちのこと、タイムテレビで見ていたらしくてよ。俺が灰原のことを好きだって知っている見たいたぜ？」
困った困ったとコナンは、頭を掻いています。
教室の扉が開き、先生と一緒に黒い服を来た男子生徒が入ってきました。その格好は、教室から凄く浮いている。そのことに気がつかない本人も本人だけど・・・。コナンは、ハハと笑うしかありません。
「今日は、留学生を紹介します」
「私の名は、ドラパン。フランスから来た」
ドラえもんズ、沈黙。もちろん、コナンもなおのこと、黙っていました。
どうして、昨日来たばかりのドラパンがここに入ってくることが出来るの？
みんな不思議に思ったことだろう。
ドラパンは事前に転入手続きをしていたのです。だから、帝丹に来ることはできる。
もう、コナンは笑うことしか出来ませんでした。
（もう、どうにでもなれ）
そうして（？）帝丹小学校で楽しみが増えた（？）日が始まるのです。

コナン告白！ドラパン帝丹小学校へ（後書き）

今回も長くなりました。
ドラパンも加わり、大反乱な？日々が始まります。
評価・感想・ダメだしありましたら、お願いします。

つかの間の休息…ドラズとコナン

マタドーラ・・・
いつも私の視界に入ってきて好きだとか、愛しているとか言いますよね？
実は私もあなたのこと好きなんです。
でも、それをあなたに言ったら、図に乗ってしまうから言わないんです。
好きですよ、マタドーラ

王ドラが帝丹小学校の屋上にいます。

それをタイムテレビでニヤニヤしながら見ているものがいました。
「ドラえもん、何見ているの？」
後ろからコナンに声を掛けられて、ビクッと肩を揺らしました。
「コナン君。驚かせないでよ。」
「ごめん。で？何見ているの？」
「王ドラを見ているんだ。屋上に行ったきり、なかなか戻ってこないからね」
マタドーラに行かせたんだけど、なかなか戻ってこないからとドラえもんは言いました。
心配なのかなとコナンは思ったが、そんなわけじゃない、ただ楽しみたいだけだよとキッドが教えてくれました。
「キッド」
「ドラえもんは、腹黒だからな。」

キッドは、ポツリと零した。けれど、ドラえもんには全部聞こえていた。
「キッド、何か言った？」
ドラえもんは、笑顔でキッドに言いました。けれど、目だけ笑っていない。
怖っ
給食を食べ終わった休み時間。今の時間、みんなは有意義に過ごしている。
ドラリーニョは、元太・光彦と一緒にサッカーをしに校庭にいっていて、哀は相変わらず、座って医学関係の本を読んでいる。
本を持ってきていないコナンは、暇で何もすることがなくて、テレビを見ているドラえもんに声を掛けました。
何を見ているのかと思えば、王ドラを見ています。屋上にいるみたい
「どうして、王ドラは屋上にいるの？」
「さあ、どうしてだろう？」
ドラえもんはコナンに投げかけました。コナンがわからないのにドラえもんがコナンに投げかけてどうするんだよ！全く、この猫型ロボットは・・・
「作者は黙ってろ！」
酷いよ、ドラえもん・・

「それにしても、マタドーラ・・・王ドラのところに行ったはずじゃ・・」
なかった？のと言いたげそうなドラえもん。

実際のところ、マタドーラは屋上前の踊り場で寝ていたのです。
「そろそろ、チャイムがなりますね。戻りましょう」
王ドラが屋上の扉を開けると、マタドーラが寝ているのを見つけました。驚いた顔をしています。
「マタドーラ？どうして此処にいるんですか？」
疑問に思ったことを口にしてみたが、分からない。けれど、マタドーラを起こさないとマタドーラは欠席にされてしまうだろうそう思い、王ドラはマタドーラを起こすため蹴ろうとしました。
けれど、よくよく考えてみれば、マタドーラは私のところに来るはずだったのでは？
そんなことが頭を過ぎりました。
マタドーラにしてみれば、珍しいことなのかもしれない
王ドラは笑いを零しました。
「マタドーラ起きてください。授業に遅れてしまいますよ」
本気じゃない蹴りを入れました。そうしないと、マタドーラは起きないから
「う～……ん。もう、授業が始まるのか？」
「そうです。急がないと遅れてしまいます」
マタドーラは立ち上がり王ドラの後についていきました。
王ドラは幸せを感じました。

教室に戻ってきた王ドラとマタドーラを見て、ドラえもんたちはニヤケていました。
それをみたマタドーラは寒気が走りました。

（なんだ？この感じは・・・）
マタドーラは胸が苦しくなってきました。
「王ドラ、屋上で何していたの？」
今戻ってきたドラリーニョは、王ドラを見て聞いてきました。
「空を見ていたんです。あまりにも綺麗ですから、屋上で見たくて」
にこりと笑って言いました。
周りで見たいた男子生徒は顔を赤く染めました。王ドラは気がついていないけど・・
チャイムがなり、先生が入ってきました。
いつの間にか、ドラパンは席に座っています。
ドラえもんたちも急いで座りました。そして、五時間目の授業が始まります。

つかの間の休息…ドラズとコナン（後書き）

本日二回目の更新です
如何でしたか？
私としては、和やかなものを書きたかったので書きました。
評価・感想・ダメだしお願いします。

服部登場?!その正体は・・・

放課後、少年探偵団はドラえもんズと一緒に下校してました。
コナンは、どうしてお昼に王ドラが屋上にいたのかが五時間目から気になっていたので、聞いてみることにしました。
「ねえ、王ドラ。昼どうして、屋上にいたの？」
「空を見ていたんです。教室から見るよりも屋上で見たかったからです」
なんか、嘘っぽいんだよな
大体、王ドラが空を見るなんてそんなことしないと思うのは、俺だけなのか？
コナンは、横にいる王の横顔を見ました。
謎。
コナンは帰宅するまで考えていました。探偵事務所に来られたくない人物が着ているなど、知らずに
歩美・元太・光彦と別れ、哀と途中で別れ、コナン・ドラえもんズ（ドラパンを含め）は、探偵事務所に帰ってきました。（結局、ドラえもんズと一緒に暮らすことになりました）
「ただいま～」
「コナン君お帰り♪」
大阪弁が聞こえてきました。コナンは、まさかなと思いながら、うえに顔を向けました。けれど、期待は外れて、大阪の二人組みがいました。
「平次兄ちゃん、来て」
コナンは、笑顔を作り服部を外に連れ出しました。それをドラえもんズは、見ています。外に出た二人が何をしているのか気になり、外に耳を傾けました。外から聞こえてきた会話は、すべて中にいる人たちに筒抜け
「服部、こっちにくるなら、アポとってからって言っているだろう

?！」
「ええやないか！」
「ったく！で？なんでこっちに着たんだ？」
「そうやった！それを忘れるとこやった」
コナンは、ため息をつきました。大事なこと忘れるなよ。呆れてしまうコナン
「実はな・・・」
服部は、コナンと目線を合わせようとかがみこみます。コナンは、なんだ？と思い服部に寄り添いました。寄り添ってきたコナンを服部は、抱きしめます
「何すんだよ～、服部！放せって！」
「一回、工藤をこうしたかったんや！」
「まさか、用事ってこういう事をするためだったのか？！」
「それもあるわ！けど、これだけじゃないんわ♪」
コナンの頬にキスをしました。コナンはぞぞっと寒気が走りました。こんなことは、服部はしない。コナンは、すぐに気がつきました。これは服部じゃないと
「お前本物の服部じゃねえ！」
「流石ですね。名探偵君♪」
この口調で気障な台詞を言うやつは、一人しかいねえ。
「怪盗キッド！？服部はどこだ？！」
キッドは、変装を取り、白い服装に身を包み込みました。右目には、モノクルをつけています。
「本物の服部君は、デパートのトイレで寝ていますよ。服、借りていますので彼は裸です。完璧に着飾りますので。服返して置いてください！それでは」
煙幕を投げました。少し煙を吸い込んでしまい咽てしまいました。煙が止み、晴れました。次の瞬間にキッドは消えていました。
「キッドの野郎！そうだ。服部！」
コナンは、服部の服を持ち、駆け出しました。行く場所は、デパー

ト！
外に出たコナン、それを阻もうとするドラパン。
「どこに行く？」
「服部のところだ！あいつ、今何も着ていないんだ！」
「だったら、私が届けよう。場所は？」
「ベイカデパートだと思うけど・・」
ドラパンは、コナンの手から服部の服を取り、ベイカデパートに向かいました。
コナンは、呆然として見ているだけ
「ドラパンは、困っている人を見ると居ても立ってもいられなくなるんです」
王ドラとドラえもんズは、いつの間にかコナンの横に立っていました。コナンは、いきなり現れて驚いていた。いきなり現れると、驚く。
「そうなんだ。」
「さ、中に入りましょう。すぐにでも服部君は、こっちに来ますから」
王ドラに言われ、コナンは頷きました。ドラパンに服部を任せて大丈夫だろうと思ってのことで

服部登場?!その正体は・・・（後書き）

久しぶりの投稿です。この前投稿した短編読んでくださった方ありがとうございます。さて、今回は服部登場になりました。評価・感想お願いします！

本物服部発見！？目暮警部がやってきた理由とは…

ベイカデパートのトレイ。ドラパンは、服部に服を届けるため着ています。
一番奥のトイレで寝息を立てて服部は寝ています。ドラパンは、服部を起こそうとします。
「起きろ！」
ステッキの先っちょで服部の体を突っつきます。もちろん、服部は裸。風邪を惹かれる前に服を着させようと思ったが、なかなか起きてくれません。そこで、ドラパンは行動に出ました。
起きないなら、私が着させるしかないな
服を着させ、鍵部分を開けて服部を担ぎ、トイレから出ました。肩に持ち直しそして、そのまま毛利探偵事務所に帰ってきました。

「ただいま戻った」
ドラパンは、玄関のドアを開けて服部を担いだまま入ってきました。
結局、戻ってくるまでの間、服部は寝たまま
「ドラパン！」
ドラパンが戻ってきたことに一同みんな気がつき、扉付近に集まってきました。
真っ先に駆けつけてきたのは、和葉。途中、デパートで服を見ているとき服部を一人にしてしまったから、心配になっていました。け

れど、今服部が来たことで溜めていた涙が一気に出て来ました。
「平次〜、ごめんな。一人にして」
和葉の声に反応して、服部は目を覚ました。ゆっくり目を開けて、コナンの顔を見ました
「工藤・・？」
「服部、和葉ちゃん心配していた」
「和葉心配かけてすまんな」
「私が悪かったんや。平次を一人にしよったから」
「俺はええんや。和葉が怪我ないんやったら」
服部は、和葉に優しい言葉を言いました。それを聞いて蘭も和葉に
「よかったね」と言っています。
「少し寝させてくれへんか？眠たいんや」
「しょうがねえな。ドラパン、すまないが二階の小父さんの部屋に服部を連れてってくれないか？」
「分かった」
ドラパンは、服部を担ぎ階段を上がっていきました。戻ってきたのは、それから十分後

服部が起きたのは、五時ごろ。少し寝たことで疲れが取れたといっていました。
それまで、コナンたちは話をしていました。五時になると、ドラえもんズは蘭にお買い物を頼まれて買出しに出かけて行きました。事務所に来た服部は、コナンとソファで話をしています。
「ったく、しっかりしろよな。」
「すまん。まさか、キッドとは思いもしなかったもんだから、うっかりしていたわ」
服部が言った言葉にコナンは引っかかりました。
キッドとは思いもしなかった・・・この部分が非常に気になりました。
「なあ、服部。キッドとは思いもしなかったって言ったよな？どういうことだ？」
コナンは、中央に眉を寄せて服部を見据えました。その顔は、凄みを増していました。
「工藤にそっくりやったんや。」
コナンは、なんだってといいたげな顔をしました。
「それ本当か？！」
「ああ、本当やで。俺も最初、工藤かと思ってな」
だとしたら、キッドは俺に似ているという事じゃないか！

「ただいま戻りました。」
ちょうど、話が終わって王ドラたちが帰って来ました。王ドラを先頭にして、キッド、マタドーラ、ドラリーニョ、ドラメッド、ドラニコフ、ドラえもん、ドラパンと順番に入ってきました。みんなの手には、お買い物袋が下がっています。
蘭は、和葉から離れドラえもんズたちに寄っていきました。
「ありがとう。今日は、たくさん作るね。」

蘭は買い物袋を受け取り三階にある自宅に行きます。そのあとを和葉が着いていく。夕飯の手伝いをするんだろう
残されたドラえもんズは、それぞれ好きなことをやり始めました。
ドラニコフは、ソファに座って本を読み始めました。此処に来たときを同じ
相変わらず、ドラリーニョはヘディングをし、マタドーラは適当に寝そべりシエスタを始めました。ドラパンとドラメッドは、出かけたようです。ドラえもん、王ドラ、キッドは、何もすることがなく話を始めたようです。みんな好き勝手なことを始めました。

時間はあっという間にすぎ、蘭と和葉が事務所に戻ってきて夕飯出来たと呼びにきました。
そのときには、ドラメッドとドラパンは戻ってきていました。ドラリーニョもヘディングを止め、マタドーラを王ドラが起こしていました。眠たい目を擦っているからすぐに分かりました。蘭は、それをみてクスッと笑いました。

みんな三階に着て、それぞれの場所に座りました。
「たくさんあるな～。」
「当たり前や！人がごっつうおるんやから、たくさんあるで」
和葉はジト目で服部を見ながら言いました。
「何や？」
「何も」
和葉はフンと知らん振りをして座りました。でも、服部は何かいいたげな顔をして和葉を見ていました。
何や、変なやっちゃな。服部も座り、食べ始めました。
ご飯は、二時間くらいですべて食べてしまいました。
「ご馳走様でした！」
「はい、お粗末さまでした」
蘭と和葉は、食器を纏めて片付け始めました。
ちょうど、その時したのチャイムが鳴りました。蘭は誰だろうと思いました。
「コナン君、下に言ってきて！誰か着たみたい」
「分かった」
コナンは、子供の笑みを浮かべて言いました。
外に出て、事務所前に行くとそこには、目暮警部がいます。
「どうしたの？目暮警部」
「コナン君、蘭さんは？」
「上にいるよ。呼ぼうか？」
「ああ、頼むよ。」
目暮警部に中に入っているように言い残すと、蘭を呼びに行きました。
急いできたから息が乱れている
「蘭姉ちゃん、目暮警部が呼んでいるよ」
「分かったわ。和葉ちゃんごめんね。」
「いいって後は私がやっとくわ。蘭ちゃん行ってきなよ」
「ありがとう」

蘭は急いで下の事務所に行きました。
このとき、予想もしないことが起きているなんて知りませんでした。

本物服部発見!?目暮警部がやってきた理由とは…（後書き）

テスト期間中であるけれど、これからは平行して頑張っていきます。前回のを読んでくださった方は知っていると思いますけれど、服部はキッドでした。やっと、本物の服部が登場しました。一度で二度楽しめました？

明日でテストが終わります。また、宜しくお願いします。

評価・感想お願いします！！待っています。

完成した！これで元の姿に

探偵事務所のソファでゆったりと座っている目暮警部のところに三階から駆け下りてきた蘭が現れました。
「お待たせしてしまい、すいません」
到着一番に蘭が弁明しました。
「別にかまいません。蘭さんに聞きたいことがあります。工藤新一君は、どこにいるか知っていますか？」
蘭は、目をしばたかせました。
蘭自身も知らない　たまに電話が掛かってきたと思ったら、どこにいるのか教えてくれない
（前回のことは、全く覚えていません）
「それが・・・私にも分からないんです。たまに新一のほうから電話が掛かってくるくらいなので・・」
「そうですか。蘭さんにも分からないんですか。」
にもってことは、新一の両親も聞いたって事？蘭は、耳を疑った。
「あの。私にもってことは、新一の両親にも聞いたって事ですか？」
蘭は疑問に思ったことを聞いてみました。
「まあ、一応連絡取りましたが、知らないとおっしゃりましたので・・」
そっか。新一の両親も知らないんだ。
蘭は、不安な気持ちになりました。
「何かあったんですか？」
後ろから声が聞こえてきました。扉を開けて立っているのは、王ドラ
「王ドラさん！」
蘭は、聞こえてきたほうを向いきました。王ドラはドアを開けてずかずかと中に入ってきます
どうして此処に？蘭は、疑問に思いました
「何だね、君は！」

目暮警部は、驚いています。まあ、知らないのも無理はないか
「私は、王ドラ。宜しくお願いします」
礼儀正しく王ドラは礼をしました。
「私は、目暮。こちらこそ、よろしく。」
目暮も礼儀正しく礼をしました
警部ー！？呑気に自己紹介している場合じゃないってー！
そう思っていたけど、蘭はあえて言いませんでした。
「何かあったんですか？」
王ドラが再度聞きました。
「毛利君はいるかね？」
「父は浮気調査で今出ていまして」
それを聞いた目暮は「そうかね」と言いいました。
「・・・・・相変わらずだな・・・」
聞こえないくらいの声で言いました。
けれど、今の目暮警部は、切羽詰っているような感じ。だから、蘭は言ってしまいました。
「私に言ってくれませんか？後で父に言っておきます」
警部は、戸惑ったような目をして蘭を見ていたが、五分後蘭に向き
「分かりました。コナン君を呼んできて下さい」
いい終わりコナンが現れました
「コナン君！」
蘭と目暮警部が同時に言いました。そうとうびっくりしています
いつからいたの？といいたげな顔を向けています。二人の視線に気がついたのか、コナンが言いました。
「最初から聞いていたよ。」
「そうかね。では、本題に入らせていただこう」
目暮は、ゴホンと咳払いをし、話始めました。
今、警視庁である事件を扱っていること、そしてジンが逃亡したこと。もちろん、ニュースで放送されたからコナンもそのことは知っていました。

「じゃあ、新一兄ちゃんに手伝って欲しいってこと？」
「そうなんだ。コナン君も知らないよな。新一君がどこにいるのか」
「う・・ん、知らない」
コナンが知らないはずがありません。コナンは、新一なのだから・・
王ドラは知っています（前回のを読んでください）。今のコナンは、
新一じゃないから歯がゆい思いをしていることは王ドラに分かりま
した。
一刻も早く元の姿に戻って警視庁の事件に係わりたいが、いつ組織
のやつらが狙ってくるのかが分からないから手の内ようもありません

阿笠邸―地下室

今現在、灰原はアポトキシンの解毒剤を作っています
学業をこなしながら、研究を続けています。早く、コナンを元の姿
に戻してあげるために・・
「もう少しで完成するわ。今度こそ、成功よ！」
今回ばかりの解毒剤は、完成度の高いものなので、灰原も自身があ

るようです
ポンと音を立てて煙が上がりました。そして、完成。ビーカーの中にアポトキシンの解毒剤が出来ていました。
「これを工藤君に渡せば、元に戻ることが出来るわ」
出来たのは、二個。自分のコナンの分。
灰原は立ち上がり、阿笠邸を飛び出しました。博士が声を掛ける余裕もないくらい
一刻も早くコナンを元の姿に戻してあげるために・・・
（待っていて、工藤君。今から持って行くから）
息はだんだんと乱れ、探偵事務所に着いたときには、完全にぜーぜー言っていました。
階段を駆け上がり、探偵事務所の明かりがついていることに気がつくと、勢いよく扉を開けました。
「江戸川君、出来たわ！解毒剤よ！！」
探偵事務所にいたみんなは、灰原を見ています。目暮警部に蘭・王ドラも。
コナンは、灰原のそばに行きました。
「本当か？！」
「ええ、此処に在るわ」
灰原は、手の中を開けて見せました。そこに解毒剤。灰原はコナンに１つ渡しました。
「これさえ、飲めば元の姿に戻ることが出来るわ」
「サンキュ！ありがたく頂くぜ！」
コナンは笑っています。
此処にいる王ドラ以外は、何を言っているのか理解できません
「良かったですね、コナン君。」
王ドラは、コナンに近寄り、祝福の言葉をコナンに言いました。
「灰原のおかげだよ。灰原が頑張ってくれたからだ」
哀は、顔を赤くしています。
「そんなこと・・・。あなたに励まされていたからよ」

哀は赤くなりながら答えました。

完成した！これで元の姿に（後書き）

今回は、ちょっと長めです。
感想・評価待っています！お願いします！此処のところ、評価してれません、お願いします！！淋しい・・・
次回は・・・・・コナンと哀が元の姿に戻ります！！宜しくお願いします！！！！

元の姿に戻ったと思ったら・・・

灰原からもらったＡＰＴＸの解毒剤。まさか、こんなに早く手に入るなんて

「蘭姉ちゃん、僕元の姿に戻るから」

「コナン君とは、さようならなんだね？」

「そうだね。今まで待たせてごめんね。でも、これからは、新一兄ちゃんがそばにいてくれるから」

コナンは、蘭に言い灰原と王ドラと一緒に探偵事務所を出て工藤邸に向かいました。

でも、そう簡単にいくわけがありません。下に降りようとしたら、後ろからドラえもんに呼び止められました。

「どこに行くの？」

振り返り、ドラえもんを見ました。ドラえもんの横には、キッド、ドラニコフ、ドラメッド、マタドーラ、ドラパンといます。みんなこっちを見ています。

「これから、工藤邸に行きます。」

王ドラがドラえもんを見つめて言いました。

ありがとう、王ドラ。

コナンは心の中で言いました。言葉に出来ないけど、伝えたいから

「分かった。僕たちも行くよ」

「いいえ、何人かは此処に残ってください！蘭さんたちを護って下さい」

「分かった。では、私が残ろう。ドラメッド・ドラニコフ・キッドは此処に残って、残りは王ドラについていけ」

ドラパンが指示を出しました。王ドラもそれに賛成しています。

「分かった。」

ドラえもん、ドラリーニョ、マタドーラは、王ドラについて工藤邸に向かいました。

工藤邸に向かう途中、王ドラがコナンに話しかけてきました。
「コナン君、戻ったら何をするか考えていますか？」
心配している声。そんな王ドラにコナンは、笑って応えました。
「考えているよ。まずは、目暮警部にちゃんと言わないとね。」
王ドラは、微笑みました。安心したという事でしょう。
工藤邸に到着しました。誰もいないはずなのに明かりがついています。誰かいるのでしょうか？
コナンは、不審に思いながら、扉に手を掛けました。開けようとすると、中から開きました。
コナンと哀は、驚いています。それはそうでしょう。いないはずの家に人がいるのですから
扉を開けた人物は、「新ちゃん！」と言いました。
この声は・・・
コナンは、恐る恐る中を見ました。案の定、新一の両親である工藤友紀子と優作がいます。
「なんで、父さんと母さんがいるんだよ？！」

「んもうー、新ちゃん冷たい！いいじゃない、たまには」
友紀子がコナンに抱き着いてきました。コナンは、引き剥がそうとしますが、大人という事もあり力には叶いません。
「新一、その人たちは？」
後ろにいるドラえもんたちを見た優作は、コナンに聞きました。
「友達だよ。とにかく、中に入れてくれないか？」
「そうだな。友紀子、離れてあげたらどうだ？」
優作が友紀子に言うと、分かったわとコナンから離れました。
コナンと哀、ドラえもんたちは、中に入りました。まずは、紹介からということで、新一の両親友紀子と優作に自己紹介をしました。
「王ドラといいます。コナン君と灰原さんと同じクラスです。」
「僕は、ドラえもん。王ドラとドラリーニョ・マタドーラと友達です」
「俺は、マタドーラ。セニョリータ、これをどうぞ！」
マタドーラは、いつもと同じように手にバラを持ち、友紀子に突き出しました。
「あら、ありがとう」
友紀子は、それを受け取って喜んでいます。
「マタドーラ、あなたって人は・・。友紀子さんは、優作さんという旦那さんがいるんですよ？ナンパしてどうしますか」
王ドラは呆れたと言う声を出しています。
「僕、ドラリーニョ！宜しく」
ドラリーニョを見て、友紀子は可愛いと言って抱きつこうとします。ぎゅうぎゅうにされたドラリーニョを見て、王ドラはやれやれと手を首辺りに持って着てため息をつきました。
「コナン君、私たちは此処にいますので、早く済ましてください」
「そうだな。じゃ、行ってくるよ」
コナンは、階段を上がって新一の部屋に向かいました。
「じゃ、私も」
哀は、工藤邸から出て行き博士の家に行きました。

「あれ？新一は、元の姿に戻ることが出来るのか？」
「はい、灰原さんが無事、解毒剤を完成しました。」
「そうか」
優作は、フッと笑いました。友紀子も良かったと笑っています。

コナンは、服を脱ぎました。手には、解毒剤を持っています。
「よし」
解毒剤を口に入れ、水を喉に通しました。
体徐々に熱くなり、成長が早くなっていきます。耐え切れなくなり、叫びました。叫び声が部屋に響きます。そして、体が元に戻りました。
灰原も同じようにして、宮野志保の姿に戻りました。

元に戻った体で余韻に浸っていると、扉をノックしている音が聞こえてきました。
新一は、服を着ました。着終わると、扉が開きました。
「新一」
友紀子と優作です。部屋に入り、新一の前に立ちました。
「良かったわ。元の姿に戻れて」
友紀子は、一筋の涙を流しました。
「灰原は？」
「阿笠邸にいるわ。」
「そうか。ちょっと、行ってくる！」
新一は、そういい部屋を出て、家を出ました。向かうは、灰原のところ

呼び鈴を鳴らしました。中から博士が出てきました。
「新一、元の姿に戻ることが出来たのだな？」
「ああ、おかげでな。灰原のおかげだぜ！ところで、灰原は？」
「部屋にいるよ」
新一は中に入りました。灰原の部屋に行きます。
ノックをすると、中からどうぞと声が聞こえました。中に入りました。
部屋の中に視線を向けると、志保の姿がありました。

「灰原、元の姿に戻ったのか！？」
「ええ、そうよ。あなたと一緒に組織を倒そうと思ってね。それにもう、無理はさせたくないから」
志保は、新一から視線を逸らしました。最後の言葉を言うのに見てられなくなったのでしょう
「灰原」
「もう、灰原じゃないわ。宮野志保よ」
「そうだな。志保」
志保は、顔を赤く染めました。

元の姿に戻ったと思ったら・・・（後書き）

久々の更新！これまでの話を手直ししていました。読んでくれた方は、気づいていると思います。
評価・感想待ってます！

パワえもん登場！あの方の正体は…（前書き）

衝撃的事実が発覚します！！本編へどうぞ！！！

パワえもん登場！あの方の正体は…

新一は、志保の手を取りリビングに来ました。
「哀君かのぅ？」
「宮野志保よ。博士」
博士は、涙をぽろぽろと零しました。
急に泣き出した博士を見て、志保が博士に寄り添いました。
「そうか、哀君も元に戻ったのじゃな」
志保は、博士の背中をそっと撫でています。新一は、それを優しい目で見守っています。
良かったな、博士
その時、ガタガタと家全体が揺れだしました！
「なんだ？何が起こっているんだ？！」
ゆれは、大きくなってきます。新一は、志保と博士と一緒に家を出ました。
家の外に出ると、ドラえもんたちがいました。
「王ドラ！どうなっているんだ？！」
「新一さん、このゆれは尋常じゃないです！誰かの仕業によるものです！！」
「そうだな！じゃ、誰が・・？」
新一が顎に手を当てて考えます。考えられるのは、黒の組織！
あいつらしかいねえ。でも、どうやって地震を起こしているんだ？
それにその意図がわからねえ
「パワえもん！あなただったんですね！？」
王ドラが工藤邸の上を見上げました。そこには・・・
「そうです。あの方のお願いですから」
俺のたちの前に現れたのは、パワえもんという猫型ロボット。どうやら、ドラえもんの友達らしい
でも、どうして組織の連中の仲間なんかに？

新一には、分からない事だらけです。
「あいつは・・・？」
「私たちのロボット学校の同じ卒業生のパワえもんです！パワえもんは、大統領の子供のお手伝いロボッ・・・という事は・・・まさか・・・！」
「王ドラ、気がついたみたいだね！そう、君が思っていることは本当だよ！」
「何てことです！アメリカの大統領は、パワえもんに・・・！」
俺には、王ドラが言っていることの意味がわからねえ。けど、今の会話を整理して考えてと・・
パワえもんは、アメリカの大統領の子供のお手伝いロボット。パワえもんが日本に来たのは・・・
「分かったぞ！あの方の正体が！」
「本当かね？新一君」
「で、誰なのよ！？」
「あの方の正体は・・・この国を動かすことが出来る人物、大統領だ！アメリカの大統領の友達」
「何ですって！！大統領がそんなことをしたら、どうなるのか分かっているの？！」
「ああ、確実に捕まるだろうな！」
「さすが工藤新一さんですね。あなたの言ったとおりですよ。」
俺のこと知っているのか！？
その時、俺の家のほうの向こうから音が聞こえてきた！何人もいるみたいだ。
「ドラえもん、王ドラ、マタドーラ、ドラリーニョ！無事か？」
キッドとドラニコフ、ドラメッドにドラパンだ。後ろからは、蘭、おっちゃんに服部、和葉さんもいる。どうやら、無事みたいだ。
「新一ー！」
蘭は、新一に向かって走ってきました。新一は、蘭を抱きしめました。

「蘭、無事か？」
「うん、私は平気」
「良かった」
「和んでいる場合ではありません！注意してください！」
王ドラに言われて、俺はパワえもんに身構えた。蘭をいつでも護れる体制に入りました。
「今日はこれくらいにしておきましょうか」
パワえもんは、そういって飛んで行きました。
俺は、構えを取るのをやめた。
「今日は、下見だけでしたね。それにしても、組織のあの方といわれる人物が・・・大統領だったとは・・・」
王ドラは、深刻な顔をして言いました。
「対策を立てないといけませんね」
「そうだな。うっ・・・」
体が熱くなり始めた。また・・か？子供の姿にまた戻るのかよ？ふざけんじゃねえ。
新一は、志保を見ました。志保も同じのようです。
「志保も・・・か？」
「どうやら、工藤君もそのようね。また、子供姿に逆戻りね。また後で会いましょう」
そう言って、志保は、意識を手放し、新一も後を追うように意識を手放しました。
バタン！
「新一？！」
「工藤？！」
「新一さん？！」
「志保君？！」
みんなそれぞれに呼びました。けれど、新一と志保は、意識を当分の間とり戻しませんでした。

パワえもん登場！あの方の正体は…（後書き）

やってしまいましたあああああ！！！！！

読者の皆様には、分かりましたか？どうして、此処でパワえもんを出したかったのか？そんな声を聞かせてください！！少し推理らしきものが入りました。

評価・感想お待ちしています！！最近、来ていないのでお願いします！！声を聞かせて下さい！！神様お願いします

（バカだ！）

怪盗キッドが組織壊滅に協力！（前書き）

今回は、短めです。

怪盗キッドが組織壊滅に協力！

気がつくと、ベッドの上で寝ていることに気がついたコナンと哀。
「良かった！工藤、お前急に倒れたんやで！」
服部がコナンの顔を覗き込んできました。心配そうな顔をしています。服部だけじゃなく、友紀子に優作、蘭、ドラえもんズ、ドラパン、和葉も。
コナンは、体を起こして、自分の体を見回しました。
「そっか、俺。気を失って倒れたんだよな。ハハ、また元に戻っちまった」
「江戸川君、必ず完全な解毒剤を作るわ」
「灰原・・・、あんま無理すんじゃねえぞ！」
隣で寝ていた哀が起きて、コナンに言いました。

「そろそろ、動きだしたってわけだな。」
リビングの扉から人が入ってきました。みんなそっちに視線を向けました。
コナンは、すぐに気がつきました。誰なのかを
敬語、気取ったしゃべり方をするのはアイツしかいねえ
「お前は、キッドだな？何のようだ？」
「私もあなたと同じですよ。組織を倒すことを協力しようと思いましてね。私が持っている情報とあなたが持っている情報を交換しましょう。」
「嫌だと言ったら？」

「その時は、その時です。」
コナンは、何も応えません。キッドは立ったままで、動きません。
「お前は、どうしてビッグジュエルばかり狙うんだ？」
「いう事は出来ません。」
「そうか。情報提供すればいいんだろ？」
「そうです。私も知っていることなら、話しますよ」
コナンは、キッドに協力することにしました。これがドラえもんズとドラパンが怪盗キッドにあった初めての出来事

「コナン君、あの方は？」
怪盗キッドが消えた後、王ドラがコナンに聞いてきました。
さっき、来てすぐに言ってしまった怪盗。王ドラたちにとっては、初対面でありました。
紹介もなしに話が進んでしまい、何がなんだか混乱しています。
「アイツは、怪盗キッド。ビッグジュエルばかりを狙う怪盗さ」
コナンは、ニヤニヤしながら言いました。
「そうですか。」
つまり、ドラパンとは違うタイプの怪盗という事ですねと、王ドラは言って頷いていました。けれど、ドラパンは納得したと言う顔よ

り、小難しいといったような顔をしていました。
「今日は、ドラちゃんたち此処に泊まっていきなさい！」
「ありがとうございます」
「新ちゃんもいいわよね？」
友紀子の笑顔は、有無を言わせないという感じです。コナンは、頷きました。
母さんに逆わらないほうが賢明だな。
「分かった、泊まっていくよ」
コナン、服部、ドラえもんズ、ドラパンは、工藤邸に残ることになりました。
蘭・小五郎・和葉は、毛利家に戻ることにし、灰原と博士は、阿笠邸へと移動しました。

怪盗キッドが組織壊滅に協力！（後書き）

評価・感想・ダメだしお願いします！本当にお願いします！最近来ないので！何でもいいです。要望なんでも！

いよいよ襲撃なるか?!（前書き）

短いです。

前回の続きになっております。

いよいよ襲撃なるか?!

その日、夜は工藤邸に泊ることになったドラえもんズとドラパン、服部。コナンは、元々この家の子なので当たり前だが・・・まあ、それは置いておいて
夕飯が出来るまでの間、組織の対策を服部・ドラえもんズ、ドラパンと考えていました。
「なあ、工藤。これから、どうする気や?」
「俺たちの力じゃ、足りねえ。ＦＢＩにも協力してもらうつもりでもいる」
「ＦＢＩとはなんですか?」
王ドラが聞いてきました。
まあ、知らないんだから無理もないか。一呼吸置き、コナンはわかるように教えました。
「まあ、警察と似たようなものかな。そこに知り合いがいるし、同じ組織を追っているから」
「そうなんですか」
王ドラは納得したという顔をしました。けれど、王ドラの中ではもう一つの疑問を持っています。
でも、どうして大統領の命令でパワえもんが組織側に行くことになったんでしょう?そこが私にはわかりません。このことを言わざるべきか・・
王ドラはこのことをみんなに言うべきか考えています。ため息をつきました。
その時、ドラリーニョが王ドラを見ました。
「王ドラどうしたの?」
大きな真ん丸い目で不思議そうに王ドラを覗き込んできます。
言ったほうが幾分か、気持ちが落ち着くでしょうね。
息を吐き、みんなに聞こえるくらいの声で話し始めました。

「聞いてください。どうして、パワえもんは組織側にまわったのでしょうか？大統領の命令なのは分かりますが、どうしてそちらにまわったのかが分からないんです」
その場の空気は一気に固まった。ハッと息を飲みました。みんなもずっと疑問に思ったままだったから、王ドラに言われて改めて考え出しました。
「確かにそうだな、王ドラの言うとおりだ。いくら大統領の命令だからって向こう側に回ることはない」
ドラパンが鋭い口調で言いました。
コナンにも充分分かることです。
パワえもん、あなたは何を考えているのですか？
王ドラは心の中で思いましたが、口に出しませんでした。

それから五分後、友紀子が夕飯が出来たと新一の部屋に来ました。
友紀子が作った料理はそんなに美味しいとは言いにくいけど、それなりに美味しいものでした。
久しぶりに食べたコナンも最初は首を傾げていました。
「なあ、母さん。何か入れたか？」
「隠し味をちょっとね」
今夜の夕飯はカレーです。大人数ならカレーとかそういうものが適

しているだろうと
それにしても、友紀子がカレーの中に入れた隠し味とは一体なんなのだろうか？
カレーを食べている中には、タバスコを入れる人もいました。（注；ドラリーニョだけ）
それを見て、コナン、服部、友紀子、優作は唖然としていました。
カレーにタバスコを入れるなんて絶対にありえないから！カレーにタバスコを入れるドラリーニョを見ても止めようとしないドラえもんズもすごいな。いや、その前に見慣れているのかと思うほどコナンたちは、感心していました。

いつも寝る時間より早くにドラえもんズは、眠ってしまいました。
相当疲れていたんだろうな
コナンと服部も早く眠ることにしました。

朝早くコナンたちは起きました。起きたというより起こされたのです。そう、地震に寄って
昨日よりよく揺れました。
「敵ですね。コナン君と服部さん、これを使って戦ってください！」
王ドラは四次元袖から空気砲を出しました。それをコナンと服部に

渡しました。受け取った空気砲をまじまじと見つめています。
「手にはめて戦う道具です。」
王ドラが二人にわかるように説明をしました。
「分かった！」
敵が襲ってきたら、応戦しろということだろう。
朝ご飯を食べて、コナンとドラえもんズは学校に行きました。阿笠邸から出てきた灰原を見つけて一緒に行きます。学校に行く途中、歩美・元太・光彦と会い、学校へ向かいました。
「朝、地震がありましたよね。」
光彦が言いました。きっと、朝の地震は何だろうとコナンたちに聞きたいのでしょう。
「そうだね。歩美、地震で起きたよ」
「俺も、俺も」
歩美、元太と続いて言いました。
気になるのですね。
王ドラは三人の会話を聞きながら学校へ向かいました。
「王ドラ、気になるんでしょ？歩美たちのことが・・」
コナンは王ドラから感じ取ったのでしょう。
「はい、そうです。歩美さんたちにも話しておいた方が・・・」
いいのではとコナンに言おうとしたが、コナンが遮りました。
「いや、あいつらを巻き込みたくねえんだ。」
コナンが思いが伝わったのか、王ドラはそれ以上言いませんでした。
「分かりました。もう、この話はお終いにしましょう」
学校に行く間、コナンは何も言いませんでした。

学校に到着したコナンたち。騒がしいことになっていることに気がつきました。
一体何が起こったのか、コナンは近くにいた人に聞きました。
「あの何かあったんですか？」
「コナン君じゃないか！！」
コナンが聞こうとした人物は、警視庁の高木刑事です。いつも来ている服と変わっていたので分かりませんでした。でも、どうして高木刑事がいるのでしょうか？
疑問に思ったコナンは、「事件が起こったの？！」と高木刑事に詰め寄っていました。
「まあ、あたらかずとも当からずって所よ。コナン君」
コナンたちに存在に気がついたのか、高木刑事の後ろから佐藤刑事と白鳥刑事、目暮警部が来ました。
今日の警察はみんな私服姿。今日は、非番なのでしょう。
「佐藤さん！帝丹小学校で何があったの？！教えて！！」
いつもより強気なコナンを見て、佐藤刑事、白鳥刑事、目暮刑事は怯んでいます。
いつもと迫力が違う。まるで、コナン君別人みたい。
「高木刑事！」
「実は、僕たちもさっき来たところなんだ。詳しいことは分からないんだ」
コナンは、俯きました。王ドラがコナンに提案を出しました。
「コナン君、タケコプターで見てきますか？」
「え、何？」
「タケコプターです。頭につけると飛ぶことが出来ます」
王ドラの手を見れば、プロペラのようなものを持っています。コナ

ンはそれを見て、
「見てくる」と王ドラにいい、タケコプターを借りました。
頭につけて飛びました。
帝丹小学校の真上に来たコナンは、信じられないものを見ました。
それは・・猫型ロボットで学校全体が埋め尽くされていたのです。

いよいよ襲撃なるか?!（後書き）

やっと更新できました！お待たせしてすいませんでした。
評価・感想・ダメだし待っています。

脱出！？囲まれた帝丹小学校

空から学校の様子を見たコナンは、唖然としていました。
どうして、猫型ロボットが学校に？やつらに知られたのだろうか？
だったら、尚更悪い。
コナンは、急いで王ドラたちのところに戻りました。
戻ってきたら、王ドラたちはタイムテレビに映っている何かを見ていました。
コナンも覗き込むと、そこには校内の様子が映し出されていました。
今の校内は、人がいます。先生はもちろん、生徒たちも。もちろん、一年B組の生徒、東尾マリア、坂本たくまもだ。
「やばいな。マリアちゃんとたくま君も助けなくちゃ！」
コナンが焦っています。早く助けないと
どうすればいい・・・？どうすれば・・！
「・・・・ん、・・・君、コナン君！！」
歩美がコナンを呼んでいました。
「何？！」
「呼んでいたんだよ？コナン君、なかなか気がついてくれないんだから」
歩美はそう言ってコナンから離れていきました。
「良かったです、コナン君。学校の皆さんを助ける方法があります。私が今からいう事を聞いてください」
コナン、灰原、ドラえもんズは、王ドラの言う言葉を聴きました。
「灰原さんとコナン君は、ここで待っていてください。私たちで皆さんを助けに行きます。灰原さんには、これを渡しておきます。」
王ドラは、朝コナンに渡した同じもの空気砲を灰原に渡した。
「これは・・・？」
「空気砲です。使い方は、コナン君から聞いてください」
王ドラは、そう言って校舎に入って行きました。

猫型ロボットたちを倒しながら、校舎に入ってくるのがやっとです。
中に入ってくるだけで、かなりの体力を使いました。
「私とドラえもんは、先生たちを外に脱出させますので、ドラパン、ドラメッド、ドラリーニョ、ドラニコフ、キッド、マタドーラは、子供たちをお願いします！」
「分かった」
みんな頷くと二手に分かれていきました。王ドラとドラえもんは、職員室に向かいました。

職員室に入ってきた王ドラ・ドラえもんを先生たちは見ています。
王ドラは、この学校が狙われていることを先生たちに説明している間にドラえもんは、四次元ポケットからどこでもドアを出していつでも、出られるようにスタンバイしていました。
「というわけです。早くここから離れてください！」
「どーこーでーもードアー！」
ちゃらちゃらら！という効果音を出しながら、ドラえもんがどこでもドアを出しました。
それを見て、先生たちは口を開けて唖然としています。
ドアを開けたドラえもん。早く出てくださいと誘導する王ドラ。そ

れにしたがって、先生たちは速やかにどこでもドアを抜けて、校外に出ました。
「私たちも早く子供たちのところに行きましょう！」
王ドラ・ドラえもんは、教室に向かって走り出しました。

王ドラたちと別れてすぐのこと。六人から二人組みに分かれて、教室に入って行ったのです。
ドラリーニョとドラメッドは、A組、マタドーラとキッドは、B組、ドラパンとドラニコフは、C組と別れて、生徒たちを外に出るように誘導しました。
それが終わりすぐに王ドラとドラえもんが走って来るのが、教室から出たときに見えました。
「ドラメッドー！」
ドラえもんが手を振ってこっちにやってくるのが見えました。隣に王ドラがいることに気がつきました。
「こっちは、終わりました。そちらは？」
「終わったである。我輩たちも早く外に出るである」
ドラメッドが四次元ポケットからどこでもドアを取り出しました。
ドラえもんズ・ドラパンが入るとドアは消えました。
外に出ていた先生たちと生徒たちは、学校前にいました。そこにピンク色のドアが出てきました。ドアが開き、ドラえもんたちが出て

きました。
「ドラえもん！」
コナンがドラえもんに走り寄ってきました。
「学校にいた人たちは、これで全員です。」
確かにそうだ。一年から六年生まで全員そこにいました。コナンが見て確認しました。

脱出！？囲まれた帝丹小学校（後書き）

今日二回更新できました。最近、更新あんまり出来なかったものですから。やっぱり書くのは楽しいです。
これしか、生きがいがないなと改めて思いました。
実は、学校でも書いているのですが・・・そちらは、出来次第こちらに乗せたいと思っています！
けれど、その前に・・これの続編が始まるかもしれません！とうとう、この物語も終わりに入ってきました。
評価・感想・ダメだし等・・ありましたら、お願いします！！何でもかまいません！

スタート地点に辿りついた（前書き）

とうとう、ＶＰが１０００超えました！ありがとうございます！これからも宜しくお願いします！

スタート地点に辿りついた

全員学校を脱出したコナンたち。大惨事にならなくて良かったと思いに耽っていると、声が掛かりました。
「なあ、コナン君。なんでウチラ学校前におるんや？」
コナンのクラスメイトである東尾マリアが不安げに聞いてきました。
「王ドラさんたちが来て説明してれくれたと思うけど」
「うん着たで。あんま分からなくて」
「詳しい説明は出来ないんだ。ごめん」
コナンは、頭を下げた。それを見たマリアは、慌てて
「謝らなくてもええんや！聞いた私が悪かったから」
と弁明しました。マリアは、コナンに頭を上げさせようと頑張っています。やっと、頭を上げてくれたコナンを見ました。

野次馬がドンドン集まってきました。その中にいる一人が空を指差して驚いています。
「うわああ！なんだあれ？何か飛んでいる！」
「本当だ！！」
また一人空を見て指を刺していいました。コナンたちも空を見上げてみると、そこにはこっちに向かって飛んでくるパワえもんの姿がありました。
「パワえもん！きましたね」
パワえもんは、王ドラの前に降り立ちました。

「どうだい？これを見て」
「どうして、こんな事をするのですか？！」
王ドラは、震えながら言いました。
「日本の政治を直すためだよ。この国の政治は、可笑しいところがあるじゃないか。それをやり直しをさせるためだよ。王ドラたちもそう思わないか？」
「ふざけた事言わないで下さい！政治のためでしたら、他の方法だってあるじゃないですか！」
さっきよりも大きな声で言いました。怒鳴っているといったほうがいいのかもしれません
「王ドラは、政治なんかどうでもいいというの？」
「そういうことを言っているわけではありません！パワえもん、あなた大統領の子供のお世話役なんでしょ？どうして、こんな事をするんですか？あなたの範疇（はんちゅう）じゃないでしょ？！」
「う・・・うるさい！！王ドラに分かるもんか！僕の気持ちが・・」
言葉に詰まったパワえもん。
王ドラと話している時から感じた何か。目が虚ろで、戦うことしか考えていない。これは、まるで誰かに操られているみたい
コナンが気がつきました。そばにいたキッドに声を潜めて知らせました。
「キッド、これからいう事を聞いて。たぶん、パワえもんさんは、操られている。」
「どういうことだ？パワえもんには特殊チップが内蔵されているはずだから、操られていることはないはずだ」
「パワえもんさんの目を見て」
キッドは、パワえもんに目を向けました。
「目がうつろだ。」
「あれが操られているという事。」
キッドは頭を抱えなんていることだといいました。
信じがたいことだけど、本当のことです。今のパワえもんに何を話

しても聞いてくれないでしょう。
キッドは、ドラえもんズだけに聞こえる声でパワえもんのことを話しました。
「そっか。パワえもんは、操られているのか」
ドラえもんは、納得した言う声で言いました。
「ドラえもん、気がついたのかよ？」
マタドーラが言います。
「薄々は。改めて言われると納得したんだ。」
ドラえも～んと言いたげな顔でドラえもんズのみんなは、見ていました。
「えへへ。ごめんね♪」
ごめんね♪じゃね！ふざけてんか！？と言いたげな顔してマタドーラは怒っています。今にも、ドラえもんに飛び掛りそうな勢いです。
ドラメッドが落ち着いて～と羽交い絞めにして止めているのが、やっとです。ドラリーニョも説得しています
やっと落ち着いたマタドーラを放しました。
「パワえもんを呼び戻すしかないであーる」
ドラメッドは、静かに言いました。他のみんなも首を縦に振りました。
「でも、どうやって戻す？」
ドラリーニョがゆっくりとした口調で言いました。
「そう・・ですね・・。何かいい方法は・・・」
王ドラさえも、分からないといった感じです。そういう類は、専門じゃないから分からないのでしょう

最初に言葉を発したのは、そこにいなかった人でした。

「おや、おや。何かお困りのようですね」
歩いてきた人物は、怪盗キッドです。
白い服を着て、気障なしゃべり方。でも、どうしてこいつが此処に・・・？
「おい、どうして・・此処に・・？」
「たまたま、通りかかったんですよ」
キッドはそういった。なんか引っかかるけど、まあいいや
此処にきたってことは、何かあるからだろうけど
警部たちは、目の前にいるキッドを見て固まっている。捕まえたほうが言いかと考えているようだ。
「目暮警部。今回キッドを捕まえないで下さい。キッド今回の事件を協力するみたいなので」
「ああ、分かった」
目暮警部は、ホッと息を着いた。迷っていたことがすぐに分かった。
コナンは、キッドを見据えている。
「名探偵、私を信用してくれるのですね」
「まあな。同じ組織を追っているんだったら、協力してもらったほうがよさそうだからな」
コナンは、優しい声で言いました。棘がない言い方が気になったのか、灰原がコナンに話しかけてきました。
「ちょっと、江戸川君。怪盗キッドを信用する気？」
「今回はな。けど、この戦いが終わったらすぐに対立するけどよ」
コナンは、にやりと笑いました。当たり前だろうと
そんなコナンを見て安心したのか、灰原は気をつけなさいよといいました。
「サンキュ！」
コナンの笑った顔を見て、灰原が顔を赤くしました。
（好きになったのは、工藤君が始めてね）
灰原はそんなことを考えていました。

恋焦がれる王ドラとコナン

それから一夜明けて、コナンはＦＢＩであるジョディに連絡をしました。
本格的に組織が動き出したことを知らせるために
電話で聞いたジョディは、すぐに仲間を連れてそっちに行くからと言って、電話を切りました。
「コナン、ＦＢＩの力が本当に必要なのか？」
「ああ、やつらは巨大組織だ。何人いるのか分からないからな」
コナンは、そう言ってリビングから出て行きました。今、コナンたちは工藤邸にいます。
昨日、あの後。
猫型ロボットたちが退治した後、何があったのかを警察にいいました。
住民には公表しないように　危害を加えないように　それで、事態は収まりました。
その日は、学校は休学になり授業はありませんでした。そのあと、コナンたちは、家に帰ってきました。
灰原は、今工藤邸にいます。服部も東京にいます。

チャイムが聞こえ、コナンは、出ました。

「ＨＩ、コナン君！」
「ジョディ先生、いらっしゃい！さ、入って入って」
コナンは、中に入るように促しました。ジョディ、赤井、ジェイムズと中に入りました。
外に誰もいないことを確認すると、コナンも中に入りました。
リビングに入ってきたＦＢＩは、中にいる人たちを見ました。
「たくさんいますね。」
赤井が澄ましたように言いました。
「こんにちは」
王ドラが赤井の前に来て挨拶をしました。
「こんにちは。お嬢さんの名前は？」
「お嬢さんなんかじゃありません！私は、れっきとした男です！女の子なんかじゃありません」
王ドラは、怒っていいました。
「すまなかったな。私は、赤井秀一。ＦＢＩ捜査官。よろしくな」
赤井は、にこりと笑いました。それを見て、王ドラは、顔が赤くなりました。
「私は、王ドラ。こちらこそ、お願いします」
王ドラは、もじもじしながら言いました。赤井の顔を見てドキドキしていた。
初めて赤井さんに会ったのにどうして、こんなにドキドキしているんでしょう？
顔が赤くなっていくのが分かりました。
マタドーラは、王ドラと赤井を見て面白くないという顔をしています。王ドラのことが好きなマタドーラは、赤井に嫉妬しているのでしょう。
「マタドーラ、落ち着いて」
ドラえもんが言いました。マタドーラから猛烈なオーラを感じたのでしょう
マタドーラを見れば、顔が怖いことになっています。

「それくらいでええやないか？そろそろ、本題に入ろうや」
服部がコナンを代表して言いました。
コナンが服部に目でサンキュと言っています。服部は、それに気がつきウィンクをしてきました。
コナンは、少し赤を赤らめました。かろうじて、服部のことを意識してしまうのでしょう。
灰原は、コナンに目を向けてみていました。
（浮気・・・しないわよね？）
不安になる灰原。
「そうですね。」
ジョディも賛成しました。
コナンは、昨日一昨日とあったことを言いました。それを聞いてジョディの第一声はこれでした。
「そんなことが起こっていたのね！私たちも協力するわ！」
「ありがとう」
コナンは、ジョディに笑顔で言いました。
服部は、コナンを見て顔を赤くしています。その様子を灰原は見ています。
（絶っー対、許さないんだから！）
灰原は、燃えていました。打倒、服部平次に！
「じゃ、私たちはこれで」
ジェイムズが立とうとしました。その時、ジョディが言いました。
「ジェイムズ。此処に一人置いておいたほういいかもしれないわ。」
「そうだな。いざというとき、我々に連絡をしてくれたほうがいいかもしれん」
ジョディが言ったことを賛成して、ジェイムズはある一人の男を見ました。
「赤井君、お願いできるかね？」
「いいでしょう。私も此処に残るつもりでしたので」
それを聞いた王ドラは、肩をピクリと動かしました。

それって、此処にいてくれるという事ですね！やりました。
王ドラは、嬉々しています。赤井がそばにいてくれるのが、嬉しいようです。
「それに・・・可愛いやつがいるしな」
赤井は、王ドラに目を向けました。王ドラも赤井を見ていたので、目があってしまいました。すぐに逸らしたけど、顔が赤くなりました。それを見たマタドーラは、面白くないと言う顔をしていました。
ドラえもんは、それが楽しくて笑っていました。

ジョディ・ジェイムズが帰ったその後、コナンたちは楽しくおしゃべりを始めました。
コナンと服部は、楽しく話をしていたので灰原は、入ることが出来ませんでした。
（服部君に渡さないんだから！）
灰原は、研究室に行き薬を作り始めました。
今回作ろうとしているのは、惚れ薬。なんでも、誰でも彼でも最初に見た人に惚れてしまうという便利な薬。哀がやろうとしていることは、コナンを自分に惚れさせることです。

恋焦がれる王ドラとコナン（後書き）

ちょっと、ＢＬっぽいものが入ってしまいました。
今回は、その要素は、入っていません。それはなぜか。それは、この回と次の回で終わってしまうからです。全体的に引きずりませんので、あしからず。
評価・感想お願いします。

そのぞれの告白

コナンは、灰原がいなくなったことに気がついたのは、夕飯時。
「あれ？灰原は・・？」
「そういえば、見かけませんね。一体どこへ行ったのでしょうか？」
王ドラたちも探し始めました。もうご飯が出来ているというのに
「ちょっと、研究室に行ってくる」
コナンは、ふと地下室のことを思い出しました。
コナンはそういい研究室に行く階段を降りて行きました。
コンコンとノックして、入るぞと言いドアを開けました。予想通り、
灰原はここにいました。
コナンは、何をしているのかと後ろから静かに近づきました。
「灰原？此処で何をしているんだ？」
コナンに呼びかけられて、ビクッと肩を揺らしました。灰原は、声
が聞こえたほう後ろ向くと、コナンがいることに気がつきました。
「工藤君、驚かせないでよ」
いつものクールさを保って言いました。
「悪い。で？此処で何をしていたんだ？」
「作っていたのよ」
「そうか。ご飯できたから呼びにきた。行こうぜ！」
コナンは、哀の手を取り研究室から出ました。
（工藤君・・・）
哀は、コナンに手を握られてドキドキしていました。

リビングに来ると、ドラえもんズたちがいました。
哀は、さっき此処に来る前にあるものを手にしていました。それは、惚れ薬。ちょうど、コナンが研究室に入ってきたときには、作り終えていました。
（これを工藤君に飲ませて私を見せれば、工藤君は私のもの）
嬉しくなれずに入られませんでした。哀は、さっそく試すことにしました。けれど、まさかこれが失敗に終わるとは思わず
夕飯が終わり、哀はみんなにコーヒーを入れるため台所に行きました。その時、コナンが飲むコップに惚れ薬を仕込んでおきました。
みんなのところに戻ると、哀はまずさっき惚れ薬を入れたコーヒーをコナンに渡しました。
「工藤君、どうぞ」
「灰原、サンキュ」
コナンは、受け取りすぐに口に一口飲みました。
「やっぱ、灰原が淹れたコーヒーは美味しいな」
コナンがテーブルを見て言いました。その間、灰原は、みんなにコーヒーを配って歩いています。
その時、服部がコナンを呼びました。
「工藤」
「なんだ？」
コナンは、服部を見ました。その時！惚れ薬が発動してしまいしました。
だんだんコナンの目は、据わってきました。それに顔が赤くなりました。
コナンの様子が可笑しいことに気がついたのは、服部でした。
「工藤どうしたんや？」
「なんか、変な気持ちなんだ。服部を見た瞬間、好きって気持ちが抑えきれなくなって」
その時、その場にいた人たちが驚いたことは言うまでもない。

灰原は、持っていたお盆を思わず落しそうになりました。
なんで、よりにもよって服部君なの?!私に惚れさせるはずだったのにィィィ!!
歯をギリッと音を立てました。
マタドーラは、そんな灰原を見ていました。
(いつもの哀ちゃんじゃないのは、確かだな。それにキャラ変わっているし)
怖いと思い、灰原から目を逸らそうとしたとき灰原がマタドーラに気がつきました。
「ねえ、マタドーラさん。協力してくれない?」
「何?哀ちゃん」
「服部君を暫く外に連れ出してくれない?」
「なんで俺が?」
マタドーラは面倒くさそうにいいました。
そんな役回り、面倒くさそうなことマタドーラがやるわけありません。
けれど、灰原にこんな事を言われれば、いやでも協力得ないでしょう
「へえ、そんなに私のお願いきくのいや?じゃあ、王ドラさんに言っていいのかしら?マタドーラさんが王ドラさんのことが好きだって。知られたら、なんていうと思うかしら?」
マタドーラから血のさあと引いていくのが分かりました。
そんなこと王ドラの知られたら大変なことになるのは目に見える。
とにかく、此処は哀のいうことを聞くのが一番だろうとマタドーラは考え直しました。
「分かりました。協力させていただきます」
マタドーラは、すくっと立ち上がり服部のところに行きました。
「うまくやって頂戴よ」
哀はみんなに聞こえないくらい小さな声で言いました。

「服部、散歩に行かないか？」
マタドーラは、服部の目の前に来て開口一番に言いました。
「そうやな。暇やし行こうか」
服部は、持っていたカップをテーブルに置き立ち上がりました。
マタドーラが先を歩き、そのあとを服部が追いかけるような形で外に出ました。服部は、マタドーラをこれっぽちも怪しんでいません。

暫く黙って歩いている頃、服部が話しかけてきました。
「そういえば、俺。マタドーラとまともに話したことなかったわ」
服部がポツリと零した言葉。マタドーラがその言葉に反応しました。
「確かにそうだ。こっちに着てからは、コナンと元太・光彦、歩美と一緒に遊んでいたからな。いい機会だし、ゆっくりそこのベンチに座って話そうぜ！」
そこと指されたベンチに並んで座りました。
「マタドーラって年のわりに意外と背高いんやな」
服部は、マタドーラの背を見ていいました。
マタドーラは、ドラえもんズの中ではドラメッドと並ぶくらい背があります。
とても、小学生とは見えないくらい
高校生くらいはあるだろう。もちろん、ドラえもんズみんなそうです。
一番小さいのが、王ドラ、次にドラリーニョと続き、ドラえもん、キッド、ドラメッド、マタドーラ、ドラニコフとなっています。

服部は、マタドーラを見ています。
「１８０はあるよな？」
服部は、予測でマタドーラの背丈を言いました。それが当たっているのかは、わかりません
「そうかもしんね。まあ、測らないから分からないけど」
マタドーラは、伸びました。
「なんや？もう眠いのか？」
「少しな。」
マタドーラは、目を擦りながら言いました。終いには、欠伸も出ます。
（そういうところは、子供やな。可愛い）
マタドーラにそう思ったことは内緒です。

ベンチで寝てしまったマタドーラを服部は、担いで戻ってきました。
「ただいま」
「服部、帰って来たか！」
リビングからコナンが顔を出して言いました。
コナンは、ニコニコしています。あの後、惚れ薬を飲んだコナンは、一体どうなっていたのでしょうか？
三十分前のことにさかのぼります
工藤邸を出て行った服部・マタドーラ
コナンは、あの後酒を飲んだようにふらふらしていました。取り押さえるのが大変でした。
王ドラのカンフーで一度、気絶をさせて暫く寝ていました。そして、服部が帰ってくると目を覚ましました。
当然、ドラメッドは運動不足で息切れをしています。コナンを取り押さえるのが、そんなに大変だったという事でしょう。

「話があるんだけど、いいか？」
「別にええけど」
コナンは、服部を連れて二階に行こうとします。けれど、服部は今、マタドーラを担いでいます。二階に行くなら、横にさせないと行くことができません。
「ちょお、待てや」
服部は、コナンを呼び止めました。リビングに入って行きマタドーラをソファに寝かせました。
リビングを出てコナンについて二階に上がりました。
新一が使っていた部屋に入りました。
「話ってなんや？」
服部は、真剣な顔をしてコナンを見つめています。
コナンは、服部を見ていますが、目線を合わせていません。
「俺、服部のことが……好きなんだ……」
服部は、コナンの告白を聞いて目をさっきよりも大きく開いています。
信じがたいことでしょう。まさか、コナンから愛の告白を受けるなんて思っていなかったことでしょう
服部は、コナンになんていうのでしょうか？
「俺も工藤のこと、好きやで」
「じゃあ・・・」
コナンは、顔をパアと輝かせました。けれど、服部が言っていた好きとは・・・
「勘違いするなや。俺の工藤の好きは、友達の好きやで」
服部は、コナンにきっぱり言いました。
分かっていたこと、服部がコナンに抱いている気持ちは、ただの親友。
恋愛感情があるはずがありません。
「俺もそうだぜ！服部と友達でいて本当によかったって思っているよ。俺、もう寝るから」

「さよか。俺は、もうちょい起きてる。お休み」
服部は、そういい部屋から出て行きました。
服部が出て行ったのを見て、コナンはパジャマに着替えました。
着替え終わり、電気を消してベッドに入りました。

リビングに戻ってきた服部は、王ドラとマタドーラが何か話している見ました。
そばでそれを見ているドラえもんに服部は何をしているのか聞いてみることにしました。
「なあ、王ドラとマタドーラ何話しているんや？」
「マタドーラ、王ドラに告白したんだよ。まあ満更、王ドラも嬉しがっていたみたいだけど」
ドラえもんはニヤニヤしながら言いました。
ってことは両想いか。
服部は、さっきコナンと話したことを思い出しました。
俺さっき、きっぱりと言ったんだよな。恋愛感情ないって　本当は好きやのに何であんなこと言ってしもうたんやろ。服部は、少し後

悔をしていました。なんであの時、告白しなかったのかと
落ち込んでいる服部を見て、ドラえもんが声を掛けてきました。
「平次君、どうしたの？」
「なんでもあらへん！そういえば、ドラメッドはどこにおるんや？」
ハッとしました。服部は、辺りを見回してドラメッドがどこにいるのか探しました。けれど、どこにもいないのでドラえもんに聞いて見ました。すると。
「ドラメッドなら、ドラパンと一緒に出掛けて行ったよ」
暗いところが嫌いって言っていたのにとドラえもんは言っていました。けれど、服部は最後まで聞かずその場から離れていました。

月明かりに照らされた二つのシルエットが浮かんでいます。
ドラメッドとドラパンは、ドラメッドの絨毯に乗って空の散歩を楽しんでいました。
時切、ドラメッドの袖をドラパンが握っていました。
「ドラパン、急に外に出掛けようというなんて珍しいであるな」
「二人きりで話したいことがあったのでな」
一体なんだろうと待ってドラパンを横目で見ています。
ドラパンは少し口を開けました。
「ドラメッド、私のことどう思っている？」
「え……急に言われても困るである」

「正直な気持ちでいい。私のこと、どう思っている？」
ドラパンは、容赦なくドラメッドに質問します。
「好きである。ドラパンのこと、愛しているである。」
ドラメッドは、顔を赤らめながら言いました。恥ずかしいであると
ドラメッドは言っています。
けれど、自分のことをドラメッドが好きだって言ってくれて、ドラ
パンは喜んでいます。
「私もドラメッドのこと、好きだ！愛している」
ドラパンは、ドラメッドの頬を包んで言いました。ちょうど、月の
前に来たとき

「ふ～、今日も中森警部しつこかったな～」
怪盗キッド。今日、予告上を出していた宝石を奪った帰りでした。
今日奪った宝石は、はずれ。中にパンドラがありませんでした。
ちょうど、その時月の前を通り過ぎようとしました。
「あれ？あそこにいるのってドラメッドと怪盗ドラパン？こんな時
間で何をしているんだ？」
キッドは、首を傾げて見ています。耳を澄ませば、話し声が聞こえ
てきました。
「ドラパン……本当であるか？我輩のこと…」
「本当だ。嘘で好きなんて言えるはずがなかろう」
ドラメッドは、顔を赤く染めています。熟したリンゴのような色。
「早く立ち去ったほうがいいな。」
聞いてはいけない話を聞いてしまいました。まさか、こんなところ
で告白をするなんて思いもしませんでした。なんとかして、通り過
ぎようとしますが、なんせ白い服なので目立ってしまいました。
ドラパンがキッドの存在に気がつきました。

「怪盗キッド！貴様どうして此処にいる？」
「仕事ですよ。いつもでは、ありませんが。たまたま、通りかかったんですよ」
キッドは、取り繕ってそう言って通り過ぎました。
風に乗って行ってしまいました。
（あ～、バレるかと思ったぜ！）
キッドの心臓は、バクバク言っていました。そこまで、緊張していたという事でしょう。
地上に降り、変装を解いて帰宅しました。

そのぞれの告白（後書き）

更新できました。毎日コツコツ書いていたのですが、時間が掛かってしまいました。三日掛けて！
たぶんこれから、更新不定期になります。一日で仕上げてしまうこともあると思いますが、長い一章書くのに時間が掛かってしまうこともあるかもしれません。
評価・感想お願いします！

組織突入！最後の結末

朝起きたとき、パワえもんが工藤家の前に立っていた。
不自然に思った王ドラたちは、リビングに急遽集まりました。二階から見ていたコナンも見ていたので、服部に呼ばれていきました。
一体何が起こったというのだろうかと家の中で様子を窺っていた王ドラたち。
いよいよ、リビングで話し合いを始めました。
「パワえもんは、どうしてあそこにいるのでしょうか？」
王ドラがポツリと言葉を零しました。
最初から疑問に思っていたみんなは、黙って考えています。
暫くして、誰かがしゃべりました。
「とにかく、パワえもんの話を聞こうではないか」
ドラパンが言います。けれど、聞いて何になるのかと思いました。
せいぜい、今パワえもんから何か情報を得ることはできるのだろうかと疑問に思いました。
その時、チャイムがなりました。
外にいたパワえもんが鳴らしたのだろうか？
コナンと服部が玄関に向かって歩き出しました。そのあとを王ドラと続きます。
玄関を恐る恐る開けると、パワえもんがたっていました。手に何も持っていないことを確認すると、コナンが話しかけました。
「パワえもんさん、どうかしたんですか？」
「話をしにきました。重要なことです」
この前見た目とは、打って変わっていました。不安になったコナンは、視線を彷徨わせました。
後ろにいた服部に視線を向けました。けれど、そこに服部ではなく王ドラが立っていました。いつの間にか、服部と王ドラの位置が変わっていました。

王ドラは、首を縦に振っています。ＯＫという事だろう。
コナンは、扉をさっきより大きく開けました。そして、パワえもんを中に招きました。
「ありがとうございます」
パワえもんは、軽く礼をしました。
「この前の無礼は、本当に申し訳ありません！」
そして、謝ってきた。無礼って。一体、パワえもんが何のことを言っているのか一瞬分かりません。
けれど、この前パワえもんが学校に姿を現せたときのことを思い出しました。
そういえば、あの時。パワえもんは、コナンたちに挑戦的でした。
それに、急に猫型ロボットたちに学校を襲撃してきました。
一体あれがどういうつもりだったのか知らないが・・・
「話とはなんですか？」
コナンは、ハッとして顔を上げました。王ドラは、パワえもんに聞いているところでした。
話は、今始まったようです。
「有力な情報だ。あいつらは、私を味方だと思っている。でも、違うからな。大統領は、私に言った。日本で働いている黒の組織を倒せと。」
工藤邸にいるみんなは、ハッとしました。
なんってこった。
アメリカの大統領は、日本の大統領と友達だが、黒の組織を壊滅させるためにパワえもんを送り込んだという事か。
信じがたいことだが、本当のことです。
コナンは、自分の無力さに改めて悔やみました。
「組織に突入するなら、手伝う」
コナンは、考えました。
今、突入するのならば、パワえもんの力が必要です。けれど、本当にこの人を信じていいのだろうか。みんなは、コナンがどうするか

見守っています。コナンにかかっていることです。
王ドラのコナンに歩を進めました。
「コナン君、あなたが決めてください！」
コナンは、暫くの間考えました。そして、結論を出しました。
「今は待ってください。もう少し考えてみます」
パワえもんは、何か言いかけたがやめました。
「分かりました。またきます。そのときに聞かせてください」
パワえもんは、そう言って工藤邸から出て行きました。
これが懸命な判断だろうとコナンは思いました。

「なんで、答えなかったんや！？」
沈黙を破ったのは、意気のいい大阪弁、服部平次。
どうして、答えなかったかが服部には、分からないのだろう。
「服部、まだ言うときじゃない。それにパワえもんさんを本当に信用していいのかが分からないんだ。今、組織に踏み込めば、危険になる。」
「そやけど・・」
服部の声が徐々に小さくなっていく。
コナンは、続けます。
「けれどな。チャンスは必ず来る。それを待つんだ！」
コナンの目は、ぎらぎらと光っています。パワえもんが持ってきた情報は使える、とコナンが考えていました。
パワえもんさんがチャンスを持ってきてくれた。これをどう利用する？江戸川コナン。
赤井は、静にコナンを見守っています。

●○●○

パワえもんが工藤邸を訪れてから、一週間が経ちました。
有希子と優作は、まだ工藤邸にいます。戦いが終わるまで、息子の新一（コナン）のそばにいることにしました。
組織が動いてきたので、コナン・灰原・ドラえもんたちは、学校を休むことにしました。
これからは、組織との対決で対策をすることに

ちょうど、お昼ごろ。工藤邸の呼び鈴が鳴りました。
コナン・服部が玄関に向かいました。
玄関の扉を開ければ、そこに一週間前に訪れたパワえもんの姿がありました。コナンは、無言でドアを開け招き入れました。
リビングに来たパワえもん、そのあとをコナン・服部と続きます。
「どうですか？」
「組織に乗り込む準備は、整いました！」

「分かりました。それでは行きましょうか」
パワえもんは、四次元ポケットからどこでもドアを取り出しました。リビングの中央に置くと、パワえもんが扉を開けました。パワえもんから入り、最後に王ドラが入ってドアは消えました。

「連れてきました。」
パワえもんが透き通った声で言いました。
「そうか。よく連れてきてくれた、パワえもん」
椅子に座っている人物がゆっくりと立ち上がりパワえもんに向かってゆっくりと歩き出します。そして、姿を現せました。その人物とは、大統領。
みんなが良く知っている人物。
「キッドキラーの江戸川コナン君だね？」
「はい、そうです」
「よくきてくれた。君に言わなくちゃいけないことがある。頼む！組織は私の手じゃ終えないものになってしまった。君にお願いだ！これで私を殺してくれ！」
なんと、あの大統領がコナンに頭を下げています。そして、大統領の手には、２５型の拳銃が握られています。それで撃ち殺してくれということだろう。
「お断りします。確かに僕の体を小さくしたのは、組織。でも、大統領を撃ち殺すのは、僕じゃなく組織ですよ！」
いつの間にか、組織幹部のジンが最上階大統領の執務室に入ってきていました。

ジンは、コナンの隣に来て不適に笑っています。
「悪く思わないで下さい、大統領。我々を裏切ったあんたが悪いんだ！！」
バンと破裂音が部屋に響きました。ジンが発射した拳銃が大統領の額に向かって飛んだ。
大統領は、ジンの鉄砲によって息絶えて死にました。額から血が流れ出ています。
「ご愁傷様」
王ドラは、手を合わせています。キッドは、帽子を取り胸の前に持って礼をしています。
「さて、次はお前たちだ」
ジンの凍った目は、次にコナンを見据えています。コナンは、ジンを見ています。
ジンは、引き金を引きました。
マタドーラがコナンの前に立ちふさがりヒラリマンとを持っていたっています。
「ひらりっ！」
ジンが放った弾は、ヒラリマントで跳ね返り自分に向かって飛んできました。咄嗟のことで避けられず、心臓に当たりました。そして、ジンは身悶えて息絶えました。
銃声を聞いて幹部のやつらが入ってきました。部屋の前で待機をしていたのでしょう。ジンに言われて
一番早くジンに気がついたのは、ウォッカです。
「ジンの兄貴！」
「死んでいるよ。自分の弾丸に当たってね」
コナンが静かに言いました。それを聞いて、ウォッカは泣き叫びました。
それから数分後、灰原の呼ばれて警察がきて、組織の連中は逮捕された。もちろん、その場にいたコナンたちも任意同行で一緒に警視庁に連れてかれました。

結局、その日。組織が使っていた塔は、夜何者かによって、焼かれて炎上していました。その火は、美しかったと町の人たちは言っていました。

○●○●○●

それから暫くして、王ドラたちは自分たちの世界に帰っていきました。

結局、蘭の活躍はありませんでした。それが見られなかったのがドラパンが残念がっていました。

「毛利蘭の腕前見たかった」と呟いて。

その日の夜。

灰原から電話が来ました。解毒剤が出来たとか。
それを聞いて、コナンは探偵事務所を飛び出し、阿笠邸に向かって走っていきました。
連絡を受けた服部と有希子、優作もその場にいました。
三人は、ニコニコして新一の戻るコナンを見守っていました。
そして、解毒剤を飲みもとの姿へ戻りました。

組織突入！最後の結末（後書き）

これにて、終わりです！今まで、応援ありがとうございました。今まで、大変お待たせして申し訳ありませんでしたあああああ！！！！今まで読んでくれた読者の皆様の応援心より感謝申し上げます！！！！

あ、次回からこれの続編みたいな形で新しい章が始まります。（予告しておきます）

投稿予定は、今月になります！もちろん、新しい出会い（？）が入ります！！（本当かよ）

暫くお待たせしますが、宜しくお願いします。

言い忘れてしまいましたが、それ以外で新しい小説も始めたいと思っています！！！

内容はまだ言えませんが、ある漫画の小説になっています！！！

お楽しみに！！ちなみにハードなものです。

それでは、これで失礼します！

完結～６月１５日

春崎やよい

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2883e/

名探偵とドラえもんズ～摩訶不思議な日々～part２

2010年10月9日23時18分発行